様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　6 月　5 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2008
課題番号： 19530569
研究課題名（和文）　親子関係認知に関する家族社会心理学的研究

研究課題名（英文）　Family social psychological research in cognition of parentship

研究代表者
諸井 克英（MOROI KATSUHIDE）
同志社女子大学・生活科学部・教授
研究者番号: 80182286

研究成果の概要：
親子関係認知に関する2研究を大学生女子を対象に行った。研究1では親子関係認知構造を計量的に把握するために質問紙調査を実施した(N=213)。「過去の対父親・対母親経験」，「現在の家族関係認知」，「自尊心」に関する測度に回答させた。親子関係認知構造を共分散構造分析によって明らかにした。研究2では回顧調査を実施した(N=447)。過去の親子経験を自由想起させる質問紙を作成した(対父母ごとに，肯定的・否定的経験を３つずつ自由記述)。全反応を整理し，親子関係経験の対父母での共通点と差異点を質的に明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	800,000	240,000	1,040000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会心理学
キーワード：家族　親子　青年　自尊心　父親　母親

１．研究開始当初の背景

本研究は，親子関係認知を支える心理学的メカニズムの一端を実証的に解明することによって，ジェンダー論の枠組みを組み入れた家族社会心理学の構築に寄与することを基本目的とする(諸井，1995，1996b，1998，2001 など参照)。

わが国では，80 年代になると「家族の危機」や「家族の崩壊」が唱えられ(篠崎，1996 参照)，伝統的家族の変容に関する研究が盛んになった。心理学領域でも，親が子どもにどのような関わりをもつかという養育態度の観点や，Bowlby(1969)によって提起された愛

着理論の枠組みなどに基づく，多くの親子関係研究が生み出された(諸井，2002 参照)。

しかし，柏木が指摘するように(柏木編，1993)，Bowlby による愛着理論の枠組みが研究構図に大きく影響した。つまり，伝統的家族の変容が進行しているにもかかわらず，親子関係研究は，母親と子どもの軸を中心に展開されたのである。これは，Parsons & Bales(1956)が説いた核家族がもつ性役割化機能の図式にも呪縛されているといえよう。

諸井(2004)は，小野寺(1993)が開発した尺度に基づき，父親と母親それぞれとの現在の関係経験を測定した。因子分析の結果，小野寺(1993)の結果がほぼ再現され，「情動的絆」と「統制」の２因子が抽出された。過去(「小学５・６年生だった頃」)の関係経験に関する尺度で得られた因子とともに主成分分析を行ったところ，関係経験の対象(父親，母親)を示す２次元に加え，父親と母親両方による「統制」を表す次元を得た。続く研究(諸井，2005)では，今井(1986)が作成した「社会的勢力測定基盤」尺度を利用して，父親と母親それぞれに対する現在の社会的勢力認知を測定した。父親と母親それぞれに関する影響認知の因子得点を対象に主成分分析を試みると，影響源(父親，母親)によって区別される『敬意』に加え，影響源が一体となった賞罰的態度を表す『畏怖』が現れた。これは，先行の研究(諸井,2004)で得られた知見と対応している。

2 つの研究は，父親と母親からの影響のうち「統制」機能が子どもによって一体のものとして認知されることを表している。早 60 年代に，精神分析学者の Mitscherlich(1963)は，現代社会に特徴的である非具象的な労働形態の増加が逆説的に伝統的な父親像を衰退させることを指摘した。先述した Parsons & Bales(1956)による道具性リーダーとしての父親と表出性リーダーとしての母親という核家族がもつ社会的機能からすると，Mitscherlich の指摘は，諸井(2004,2005)で見いだされた「統制」の一体性に対応するかもしれない。つまり，父親特有の「統制」的影響が消失し，母親による「統制」と相関しながら子どもに影響するのである。したがって，おそらく父親による「統制」は，本来は魅力の源泉であるにもかかわらず，父親に対する魅力にはあまり影響しないかもしれない。

一方，父親による「情動的絆」は，母親のそれとは比較的独立的に発揮される(諸井，2004)。父親と母親の役割に関する男女平等的視点が子どもに醸成されていることを前提にすると(諸井，1997 参照)，母親特有の魅力源泉であったはずの「情動的絆」も父親の魅力を高めると考えられる。

２つの先行研究を踏まえた次の研究(諸井，2006)では，父親の魅力の規定因を検討した小野寺(1984)の研究に基づいて，女子青年(大学生)を対象として，父親の魅力に対する日常的接触の影響を検討した。

この研究の主目的は，父親との接触経験が父親に対する魅力におよぼす影響を解明することにあった。そのために，小野寺(1984，1993)が作成した尺度を改変した対父親接触経験尺度と，小野寺(1984)に基づく対父親魅力尺度を作成し，女子大学生に実施した。因子分析の結果によれば，父親との接触経験は，過去(「中学 3 年生の頃」)，現在(「この 6 ヶ月間」)のいずれの場合も，「統制」と「情動的絆」の 2 側面に明確に分離することが分かった。また，父親に対する魅力では，小野寺(1984)と同様に，「人間的魅力」，「異性としての魅力」，および「両親間の親和」の 3 因子が抽出された。共分散構造分析により父親の魅力に対する父親との接触経験の影

響の構図を探ったところ，「過去の情動的絆→現在の情動的絆→異性としての魅力，人間的魅力」という影響の流れに加え，「過去の情動的絆→両親間の親和→人間的魅力」と「過去の統制→人間的魅力」という，現在の経験よりも過去の経験の影響の存在も認められた。

前者は，父親と子どもの親密な相互作用の継続が異性としての父親の魅力や人間としての一般的魅力を高めることを意味する。後者の２つの影響の流れは,注目すべきである。「過去の情動的絆→両親間の親和→人間的魅力」の流れは，トラウマの概念(Freud, 1917)やアダルト・チルドレンの概念(Woititz, 1983)と一致している。 つまり，現在よりも過去における父親との情動的不全関係が父親に対する否定的感情を引き起こすのである。また，「過去の統制→人間的魅力」は，Mitscherlich(1963)が精神分析的観点から指摘した現代社会における伝統的父親像の喪失と対応しているかもしれない。つまり，父親が自分に統制的影響をおよぼしたという過去経験は，父親の魅力を低減するのではなく，実は父親の一般的魅力を高めるのである。Mitscherlich の主張に立てば，過去における父親の統制機能の希薄化が父親存在を中性化させていくと解釈できよう。

３つめの研究(諸井，2006)では，母親と父親の関係性に関する認知の働き(諸井，1990, 1994, 1995, 1996a, 1996b, 1997)は，問題にしなかったが，子どもが両親の関係をどのように認知しているかも父親の魅力に重要な影響を与えると思われ，これらを含めた父親魅力の検討が必要である。

なお，以上に述べた研究の全体的志向性と諸知見については，対人社会心理学フォーラム(大阪大学人間科学部，2005 年 11 月)および名古屋社会心理学研究会(名古屋大学教育学部,2006 年 3 月)で発表した。

２．研究の目的

既に着手した研究(諸井，2004,2005,2006)を踏まえ，本研究では次のことを研究目的とする。①父親と母親の魅力の規定因を明らかにする，②父親・母親の魅力におよぼす過去の接触経験(記憶)の役割に関して，トラウマ概念やアダルト・チルドレン概念と関連づけて検討する。①については，両親間の関係認知についての先行研究(諸井，1990 など)の成果を絡めながら，前述したように，父親と母親の関係の営みを子どもがどのように認知しているかの影響を含めた分析を行う。②では，前研究(2006)で得られた影響関係のより緻密な検討を行う。

これらの研究作業は，ジェンダー論の枠組みを組み入れた家族社会心理学の構築に寄与することを意図したものである(諸井，1995，1996b，1998，2001 など)。

夫婦関係の男女平等化の進展に伴い，そのような関係の中で育まれる親子関係も当然変容するはずである。先述した Bowlby による愛着理論の枠組みや，Parsons & Bales(1956)による核家族論は，どちらかといえば伝統的な夫婦関係の枠組みに呪縛されているといえる。したがって，既に得られた研究成果(諸井,2004,2005,2006 など)を発展させた実証的研究を試みることは，単に父親心理学構築(柏木編，1993)への貢献のみならず，愛着理論や核家族論に基づく諸知見の充実化に役立つ。

さらには，男女平等化社会に向かう中で一過的に直面せざるをない親子関係の変容の心理-社会的側面を明らかにすることによって，親子関係に伴う種々の不全の臨床-発達的問題の解決にも有用な提言を可能にする。

３．研究の方法

(1)研究１

親子関係に基づいて既に行った研究(諸井,2004,2005,2006)で使用した接触尺度などを改変し，父親と母親の関係認知に関する測度を導入しながら，自尊心の規定因を探る質問紙調査を行う。これによって，予備的に検討した(諸井,2006)諸知見の妥当性を確認するとともに，父親と母親の関係認知が自尊心にどのように影響するかを新たに調べる。

(2)研究２

父親や母親が子どもとの接触経験をどのように認知しているかに関する定性的調査を行う。大学生に小学５・６年生頃の対父親・母親との接触を回顧させる自由記述調査を行い，過去の親子関係接触経験の特徴を定性的に把握する。回顧調査で得られたテキスト・データについて，WordMiner による分析を実施して，基本的構造を統計的に導き出す。

４．研究成果

(1)研究１

親子関係認知に関する先行文献の収集を行い，本研究全体の指針を再度確認した。そのうえで，親子関係認知の基本構造を計量的に把握するために，大学生女子を対象とする質問紙調査を実施した(N=213)。この調査では，「過去(小学上級学年)の対父親・対母親経験」，「現在の家族関係認知」，「自尊心」に関する一連の測度に回答させた。これらの測度は，先行研究で開発したものである。測度ごとに因子分析などを用いて尺度分析を行ったうえで，親子関係認知の基本構造を共分散構造分析によって明らかにした。相関分析や重回帰分析の結果を基に，「過去の対父親・母親経験→現在の家族関係認知→自尊心」のモデルを設定してAmos7.0を用いて分析した。まずまずの適合度GFI=.934(X^2=65.05, df=15, p=.001)の解を得ることができた。

(2)研究２

前年度に引き続き親子関係認知に関する先行文献の収集を行い，本研究全体の指針を再度確認した。そのうえで，親子関係認知の基本構造を計量的に把握するために行った前年度の研究を踏まえ，以下の女子大学生を対象とした回顧調査を実施した。過去(小学上級学年)の親子経験を自由想起させる質問紙を作成し，父親と母親ごとに，肯定的経験と否定的経験をそれぞれ３つずつ自由に記述させるようにした。この自由記述質問紙を女子大学生(N=447)を対象に実施した。回答者の全反応を基に記述内容を整理した。ここでは，計量化よりも質的分析に中心をおいた。全反応を整理した結果，肯定的経験では「家族旅行」や「おでかけ」などの「共行動」，否定的経験では「けんか」や「怒られる」などの「いさかい」という点で父母の共通性があったが，ジェンダー差も検出された。母親との肯定的経験は日常生活に密着したものがあり，父親との否定的経験では一方的強制に関するものが顕著であった。記述内容をさらに精査し，親子関係認知の対父母での共通点と差異点をさらに明らかにするための分析を引き続き行っている。前年度の調査では，「過去(小学上級学年)の対父親・対母親経験」，「現在の家族関係認知」，「家族経験に関わる自己評価としてのアダルト・チルドレン傾向」の間の関係を捉えた研究２の質的分析の結果を，研究１で実施した計量的研究に基づく結果と比較し，親子関係認知の心理学的意義をより明確にする。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　２件）

①諸井克英　女子大学生における恋愛関係とセルフ・モニタリング傾向　同志社女子大学学術研究年報　59 巻，119-128 2008 年　学内査読有り

②諸井克英 家族機能認知とアダルト・チルドレン傾向　同志社女子大学学術研究年報 58 巻，85-92 2007 年 学内査読有り

〔学会発表〕（計　　0 件）

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　0 件）

○取得状況（計　0 件）

〔その他〕

６．研究組織

(1)研究代表者

諸井 克英（MOROI KATSUHIDE）

同志社女子大学・生活科学部・教授

研究者番号: 80182286

(2)研究分担者

(3)連携研究者